

患者の視点で、心とからだに優しい治療法を厳選! YOMIURI SPECIAL 116

受けたい医療

新たな可能性が広がる最新治療法を、専門記者が分かりやすく解説

「病院の実力」特別版
読売新聞医療部編

本体 800円+税

2019
年版

[最新ルポ]

動き出した
「がんゲノム医療」ほか

がん
心臓・血管
糖尿病
婦人科・妊娠・出産
子どもの健康
高齢者の健康
難病・原因不明の症状ほか



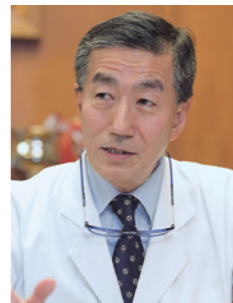
聖マリアンナ医科大学病院

神奈川県川崎市宮前区菅生2-16-1
電話 044-077-0111代
http://www.marianna-u.ac.jp/hospital/



高度専門医療と救急医療を愛の精神で 提供する地域密着型大学病院

大学病院、特定機能病院というだけではなく、いつでも安心してかかれる地域の病院としても信頼を得ている聖マリアンナ医科大学病院。診療に加え、難病治療研究でも注目が集まる。



病院長
北川 博昭

きたがわ・ひろあき / 1980年聖マリアンナ医科大学医学部医学科卒業。米国カリフォルニア州ロサンゼルス小児病院、ニュージージーランドオタゴ大学附属ウエルトン病院などで勤務。聖マリアンナ医科大学附属病院小児外科診療部長、副院長を経て、2017年4月より現職。

地域でナンバー1の病院を目指す

大学病院の役割は、一般の病院では難しい高度な医療を、安全性を保ちながら実施することです。例えば、最近のがんの薬物療法が進歩し、それを専門に行う腫瘍内科医が、腫瘍センターで最新の情報に基づいた治療を行っています。他の診療科との強固な連携は当院の大きな特色です。がん関連遺伝子を調べて治療に生かす遺伝子検査や、家族歴を有する乳がん患者さんに対しては「乳がん遺伝相談外来」を設けました。小児や若い

女性の患者さんにおいては、将来子どもを持つために卵巣組織を凍結保存し、病気が治ってから妊娠成立を目指す「がん・生殖医療」にも取り組まれています。神奈川県唯一のてんかんセンターでは、てんかんの外科治療など、より良質なてんかん医療を神奈川県民に提供できるようにしています。

2024年には新病院が完成する予定で、ハイケアユニット（ICU・HCU）、がん治療病棟、手術室の拡充を図るなど診療環境は大きく向上します。私が目指すのは、患者さんや地域の方に、ナンバー1と評価してもらえる病院になることです。診療内容はもちろん、笑顔やあたたかな対応など接遇でもここは最高だねと言われるように、連携する3病院1クリニックとともに、当院の理念である「愛ある医療」を実践していきます。

救急医療については、大学病院だからといって重症者だけを診るのではなく、併設する夜間急患センターと併せた統合ERにおける



新病院完成予定図。入院棟棟は2023年、外来などを含め全体は24年完成する予定

Topics

難病・希少疾患の病態、治療法を研究

病気の治療法を見つけ出すためには、まず病因や病態を解明しなければなりません。病気に結びつく鍵を発見し、それをターゲットに薬などを開発するわけですが、難病や希少疾患は患者さんの数が少なく、その分情報も乏しいため困難を極めます。早期解明には、全国にいる患者さんの情報を一箇所に集め、データベースとして蓄積して集中的に研究することが重要です。

私たちがメインテーマにしている「ヒトT細胞白血病ウイルス（HTLV-1）関連脊髄症（HAM）」の患者さんは、国内に約3600人しかいませんが、神経難病で進行すると寝たきり

になってしまいうこともあり、そこで全国の大学病院や研究機関と協力し、患者さんの登録システムを構築しました。そしてHTLV-1感染細胞を減少させる物質を発見し、医師主導治療で薬を開発。現在、治験は製薬会社による第3段階まで進み、2020年には新薬として承認される見通しです。この研究成果は今年、国際医学雑誌に掲載されました。診療ガイドラインの作成も日本で進められており、その研究班にも参加しています。いまはゲノム医療が急速に進み、難病・希少疾患の研究においても大きな役割を果たしていますが、重要なのは、ゲノム情報を集め、治療法の開発に結びつけるプラットフォーム（基盤）の構築です。オールジャパンの体制で難病・希少疾患に立ち向かい、質の高いエビデンスを積み上げて患者さんに治療法を提供していきたいと思っています。



愛ある医療と良医の育成

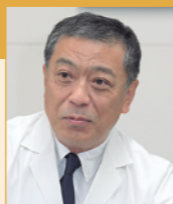
現在、バイオ医薬品の開発、ゲノムによるオーダーメイド医療、再生医療など新しい医療がめざましい発展を見せていますが、これらはすべて長い基礎研究を経て生まれたものです。研究と臨床の距離が近づいたこの時代に、その両方が使命の大学病院だからこそ、できることがあるという意識で取り組んでいるのが、難病治療研究センターの運営です。山野大学院教授らの地道な研究により、HAMの治療薬開発で世界的な成果を上げました。

本学には、変化することを躊躇しない、イノベーションに向き合い、質があります。大学、附属病院、クリニックの観智を結集し、新しい何かを作り出す。その強い気持ちを持ち、発信することが私達の仕事です。新大学病院建設により、職員に思う存分力を発揮してもらおう環境を整えます。これからも愛とともに確かな医療を提供したいと思っています。



学校法人 聖マリアンナ医科大学
理事長 明石 勝也
あかし・かつや / 1982年聖マリアンナ医科大学医学部を経て98年同大救急医学教授。2005年より現職。

腫瘍内科・消化器外科・内科の連携でがん治療の質向上



副院長
消化器一般外科診療部長
大坪 毅人 教授
おおつば・たけひと / 1986年聖マリアンナ医科大学医学部卒業。2014年より同附属病院副院長。2017年より医療安全責任者兼務。

がん治療は日進月歩ですが、同時に複雑化もしています。複数の診療科が連携し、専門性を発揮することで質の高い治療が可能になってきているのです。消化器がんはかつて開腹手術がメインでしたが、腹腔鏡手術が増え、早期なら内視鏡手術が第一選択肢です。また、抗がん薬など薬物療法も進化しており、当院では消化器外科医、消化器内科医、そして腫瘍内科医などが話し合っ総論的に判断し、患者さんに最も適切な治療法を提案しています。患者さんが最

腫瘍内科（腫瘍センター）は、がん薬物療法を行うすべての診療科と連携しています。当センター運営委員会の各部署には各科の担当者が参加し、がん薬物療法の最新情報のほか、がん薬剤の変更など重要な情報を共有。密接な関係を築いています。消化器外科・内科からは全患者さんの薬物療法をまかされ、オンタイムで相談に応じる体制を整えています。放射線科や病理科も含むチームでシームレスな診療を行い、患者さんに、最適な治療を最短で届けることが



腫瘍内科 診療部長
腫瘍センターセンター長
中島 貴子 教授
なかじま・たかこ / 1998年横浜市立大学医学部卒業。国立がんセンター中央病院（現国立がん研究センター中央病院）等を経て2010年聖マリアンナ医科大学臨床腫瘍学講師。2016年より現職。

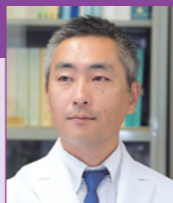
がん治療ではゲノム医療の重要性が増し、国はがんゲノム医療中核拠点病院を全国に11カ所整備しました。そのうちの国立がん研究センター東病院、慶應義塾大学病院のがんゲノム医療連携病院に、当院が認定されています。現在は、がん遺伝子検査の保険適用に向け準備中です。免疫子エックポイント阻害薬に治療から関わった経験も生かし、よりよいがん治療を提供したいと考えています。



腹腔鏡手術など低侵襲化が進む消化器外科の治療。腫瘍内科（腫瘍センター）の支援も大きい

チームの力があるから、一人ひとりの患者さんに最適な治療を提供できる

ハートチームが一体となり治療の難しい患者さんにも対応



循環器内科
診療部長
明石 嘉浩 教授
あかし・よしひろ / 1996年聖マリアンナ医科大学卒業。ハートセンター副センター長。日本循環器学会認定専門医。

心臓・大動脈疾患のカテーテル治療を受ける患者さんは急増しています。当院のTAVI（経カテーテル的大動脈弁置換術）実施数は年間100件を超え、すでに200件を実施しました。2016年1月〜2018年9月、TAVIは低侵襲の治療として知られていますが、適応判断が非常に重要で、術前の診断が成功の鍵を握るといっても過言ではありません。ハートチームには、心臓血管外科のほかに、心臓の弁や大動脈の画像検査に習熟した放射線科技師や、日本

循環器疾患は、薬物療法やカテーテル治療といった内科的治療と、外科的治療が拮抗しており、1つの診療科だけで適切な診療を行うことは難しくなっています。循環器内科と心臓血管外科、そして関連する診療科やコメディカルが高い専門性を生かしながら、ハートチームとして連携することで治療成績も向上します。



毎週水曜日のTAVI・弁膜症のカンファレンスには、宮入教授とともに参加



難易度が高く、慎重な術後管理が必要な手術が増えている心臓血管外科

高齢者にも積極的な治療が可能となった一方で、冠動脈と弁の両方に問題のある方や透析中の方、感染性心筋膜炎などは外科手術でないと対応できません。つまり、心臓血管外科ではより高度な判断と手術技術、術後管理が求められる患者さんが増えているのです。

手術の安全確保はいつでも重要な性を増し、術後管理に循環器内科の知恵を借りるなど、ハートチームの協力と日頃の連携に支えられています。